

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	22 / 2007 / 1-25
タイトル	青森の水環境座談会(上) 町なかのナマズ、フナ、ドジョウたち
著 者 名	座談会参加者

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

青森の水環境座談会(上)

町なかのナマズ、フナ、ドジョウたち

と き: 2007年4月24日

ところ: 青森市長島養老乃瀧



左から室谷・蝦名・二唐

出席

蝦名	憲	(初代、昭和5年生)
五十嵐	正俊	(3代、昭和8年生)
江口	祥一	(3代、昭和7年生)
五十嵐	豊	(6代、昭和10年生)
棟方	啓爾	(6代、昭和11年生)
二唐	寿郎	(7代、昭和年生)
小山内	孝	(顧問、昭和年生)
室谷	洋司	(10代、昭和15年生)
山道	忠郎	(14代、昭和18年生)
工藤	芳郎	(17代、昭和22年生)
三浦	博	(17代、昭和22年生)
石郷岡	総一郎	(25代、昭和29年生)

室谷(司会) 最近、動物、植物、昆虫などとまわりにいなくなってしまったとして、レッドデータ・ブックとか、さまざまなものが出されています。いかに保全していったら良いのかが話題になっています。ただ、それだけでなく、私たちが昔、家の近くとか野山で触れあった生き物たち、それらと遊んだ、子どもの風俗とか習慣、これらもまわりから消えてしまったわけで、それもまさにレッドデータだと思います。

しかし、こういったものは標本として残すことができないし、それでは座談会として皆さんに大いに語っていただき、それを「やぶなべ会報」に記録として残していけば、後世においてこういうことがあったのかと、関心をもっていただけるのではないかと。モノでなくても。ナマズを捕まえたとか、モクズガニとか、その採り方、食べ方、あるいは生き物の習性などと。そういう話を出していただいて、さらにこれに図や写真でも加えれば面白いものになるのではないのでしょうか。

皆さんの周りにあった水辺を思い出していただくために、昭和5年とか14年とかの地図を資料として回覧しております。皆さんの活動の場所というか終戦直後の環境を表していると思います。遊び場であった当時の位置関係が分かるのではないかと。

それでは、どんどん話を出してください。順不同で結構ですし大いに脱線してもOKです。あとで編集者の方で整理します。またのちほど必要に応じて、きょう都合が悪くて出席できなかったかたがたに紙上参加のかたちで話をうかがいます。

まず、町中の遊び場というか川の話から…。

近くの川、堰はナマズの宝庫

五十嵐(正) わたし急いで一覧表(次号に掲載)をつくってきましたのでご覧ください。皆さんも思い出して他にもあれば話してください。

蝦 名 トップバッターとして、わたしは小学校を終わるまで市内に間借りしていました。家はずっと離れた野内だったものですから。水との関係で一番記憶に残っているのは、今の浦町小学校の北側、元の「モンジョ」ですね。

室 谷 「モンジョ」って何ですか？

蝦 名 現在の県立青森中央高校の前身です。当時は浦町奥野の、今の浦町小学校が建っているところにあった青森市立女学校のことで、近くに盲学校があったことから「盲女」、「モンジョ」という愛称で男子校生は呼んでいました。その女学校の北側の堰と私の住んでいた家との間に農業用水が東西に流れていて、小さい木の橋がかかっていた。その川では色んな事件があったのです。ひとつはすぐ下の弟がその川に転落しました。大した深いところではなかったのですが、あわてて助け出して事なきを得ました。そして一番の思い出はナマズです。ナマズが跳ねたりして、家で掛けている蚊帳を持ち出してすくいとったり。すごい大きいナマズでした。

五十嵐(正) その川の護岸は何でしたか？

蝦 名 板でした。

江 口 松原中学校、昔の青森医専の方ですか？

蝦 名 あっちでなくて今の市役所の議会の前をまっすぐ南側に行ったところですよ。

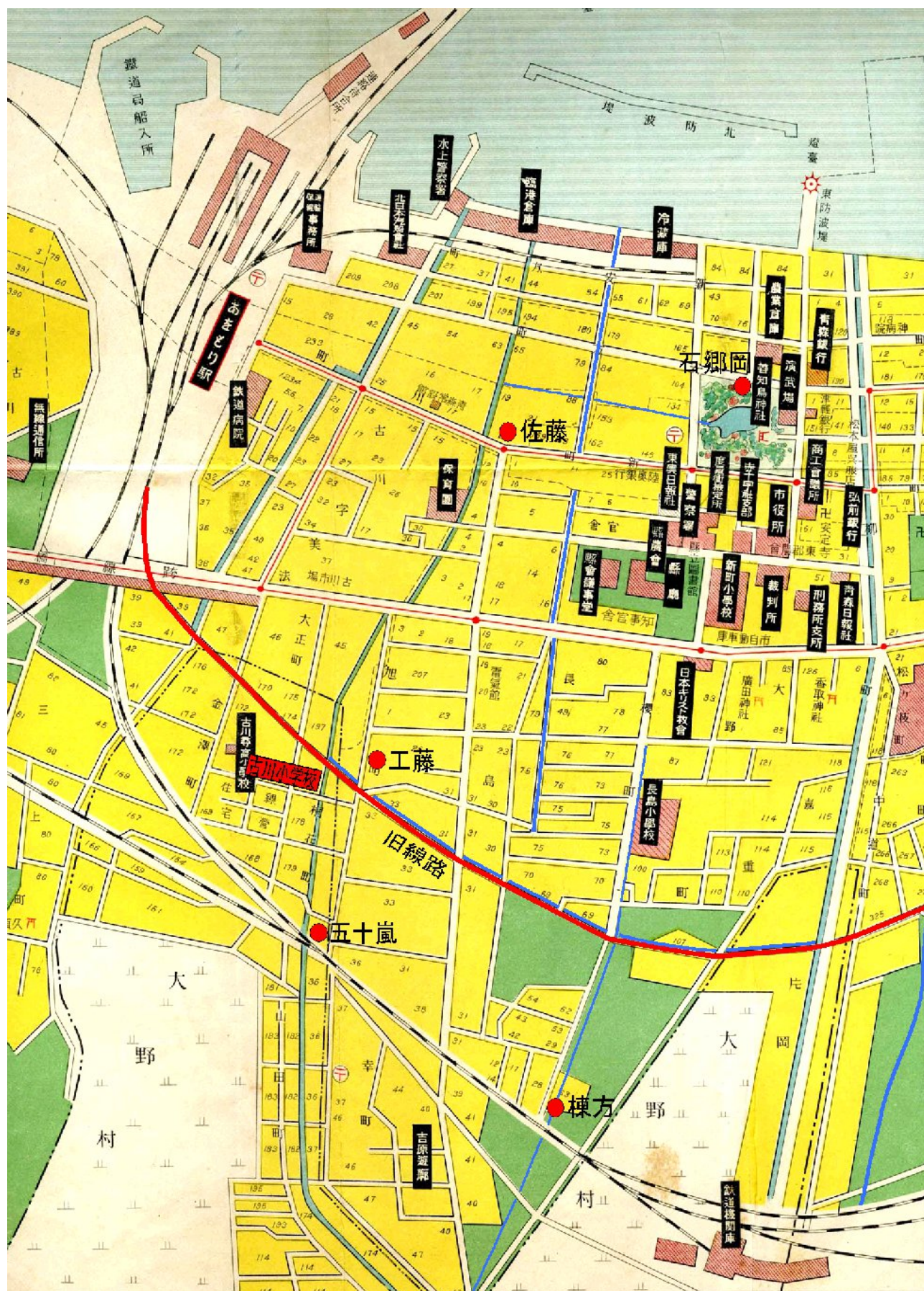
五十嵐(正) 柳町の水路とは違うんですね。柳町の水路よりもっと東側。「モンジョ」といったのは、地図(8 頁の図 2 を参照)に高女校というのがありますね。北片岡の東側に当たります。

室 谷 それは昭和の何年頃ですか？

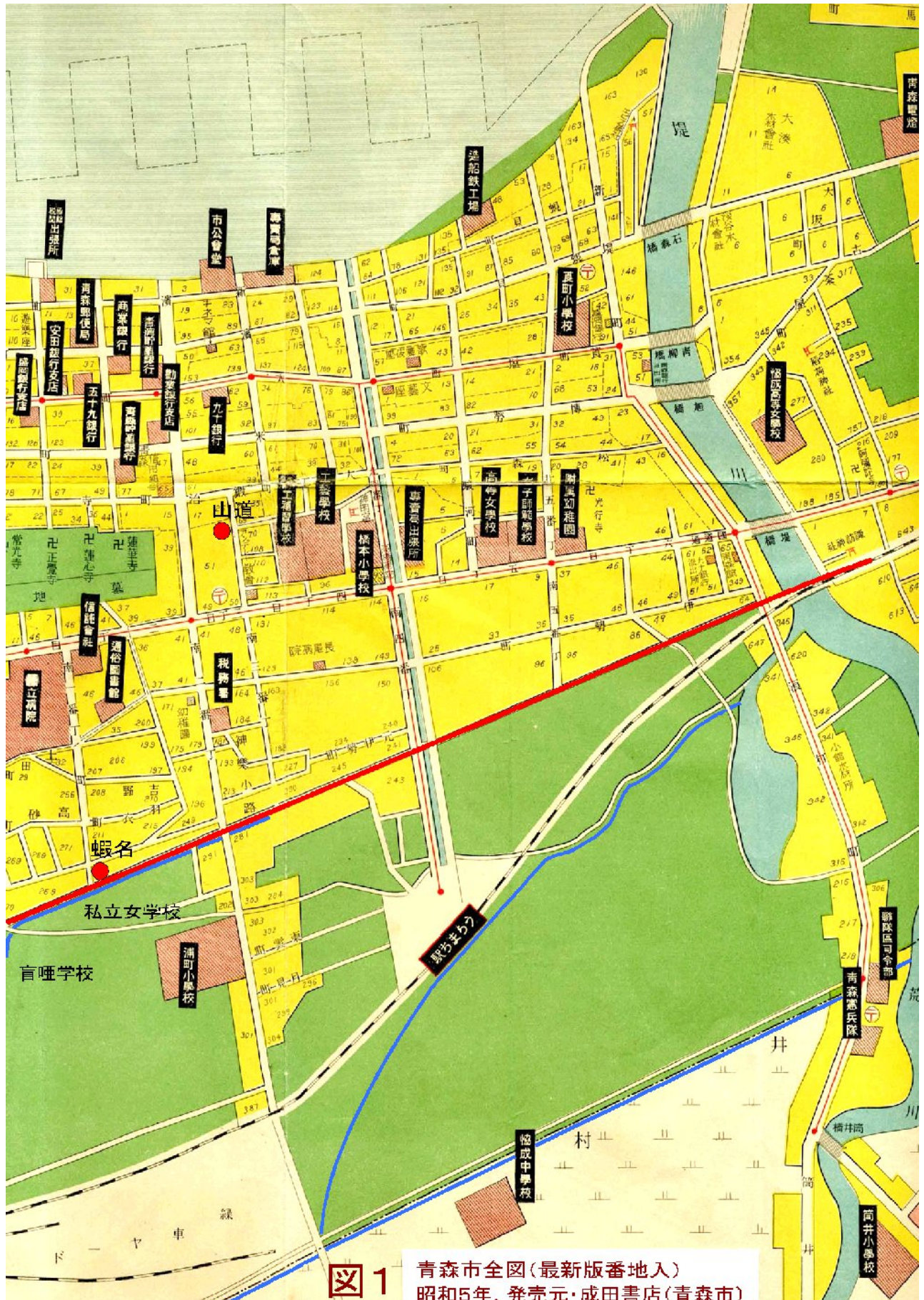
蝦 名 10 年から 12 年あたりです。ナマズはどこにでもいました。



[写真1] 昭和戦前期の柳町市場風景。画面中央の右側にシダレヤナギの並木が見えるが、その下に水路があり青森港まで続いていた。この水路は南方郊外から操車場を潜行して流れてきた。途中で金沢堰から合流した。(青森県史編さんグループ所蔵)



[図1] 青森市全図(最新版番地入り)、昭和 5(1930)年、発売元・成田書店。これは青森市の戦前の市街図であり、このあと昭和 20 年の空襲後の大規模な区画変更があった。古川小学校とか青森県庁などの建物と街路・水路との位置関係が現在と異なっている所も多い。なお、原図には南北の水路が青色で表されているが、多く



のかたがたの証言や他の資料をもとにして、東西の一部の水路を補足している。さらに旧線路の位置を赤で示した。座談会出席者で本図の中に住んでいたひとについては、赤丸を付し名前を書き込んだ。

江 口 ナマズは酸欠でよく浮いていました。それをいっぱいにとってきてカバヤキにして食ったものです。それは昭和 33 年頃でも方々でありました。今の市民センターとか北斗高校があったところにも川があつて…(12 頁の図 3 参照)。

蝦 名 だいたい同じ場所だと思う。あるいは繋がっていた川かどうか。

江 口 とにかくナマズはすごかった。夏になると酸欠になるので浮いてくるんです。

棟 方 いま、蝦名さんから町中の話が出ましたが、わたしもついでに市内の川の思い出話を…。長島小学校の西側を川が流れていました。川の護岸は全部、板でした。この川はむかし荒川から流れてくると思っていましたが実際は細越の方からヤードを潜ってきている。わたしの家は線路のすぐ近くです。

川は家の東側を流れていて、それで毎年、そこが「イガル」んです。イガルって分かりますね。津軽弁で、ちょっと講釈すると、春 4 月頃、雪解け水で水があふれてしまう。洪水です。ちょうど旧線路から線路のあたりが毎年そうなる。住宅地があつて東はすぐ田圃。それは北片岡までなんにもない、全部が田圃になっていて一帯がみんなイガッてしまうんです、沼のように。水は線路の下を潜ってくるんですが、そこでモチ網(四ツ手網)をかける、竹の竿で、こうやって。あれをかけると 30 分位で魚がバケツに 1 杯も 2 杯もとれる。

ドジョウ、フナ、ナマズ、なんぼでもとれました。春にイガルときはこういやってとる。とにかくナマズは多かった。それからハグロトンボが多かった。缶詰の缶を川に捨てるとそれに必ずモクズガニが入っていました。

室 谷 何の缶詰？

棟 方 あれはサケの缶詰、何でも良いのと思うが大体そういうものでした。あまり大きくない脱皮したての柔らかい奴とか。あれは終戦の前でした。終戦後もそうであつたかも知れないが。当時は、北片岡のあたりまで全部、田圃でした。そこで冬に雪の上で凧を飛ばしました。ワラハド(児童)の手に糸を縛って凧を引っ張らせたりして。

とにかくナマズはすごかったし、トンボも多かったし、また家のなかにホタルが飛んできました。今の長島 4 丁目(8 の 12)がウチで、すぐ川にかかっていて北側へ流れていました。長島小学校の西側と道路の間を北に向かつていて、小学校の友達がそこに落ちたことがあるんで記憶は鮮明です。その向こうは県庁方向ですが、どこまで流れていったかは分かりません。

オヤジにはその川によく投げられました。母が慌てて拾ったもんだと、いまでも話してくれる。(笑い) その操車場を潜ってくる穴はコンクリートで今でも残っています(6 頁の写真 4・5 参照)。子どもの頃はずいぶん大きいと思っていましたが、いま計ってみると幅は 1 メートル



[写真2] 1960 年 7 月に発生した青森市内の洪水。これはイメージ写真で、雪解け時と台風時には市内各所が洪水に襲われた。(東奥日報社所蔵)

ちょっとで深さがもうちょっとありますね。

江 口 昭和 35、6 年まではそういう状況でしたね。

小山内 そうですね。昔は遊びが過ぎれば家に入れてくれなかった。

棟 方 そう、叱られると馬小屋に隠れたり…向かいに馬小屋があった。メシを食わせてくれない、叱られると。

室 谷 農家の馬ですか？

棟 方 向かいの家には「ダジンツケ」の人がいて、日通に勤めていましたが、その前は「ダジンツケ」というか「バクロウ」というか。そして馬屋があって、そこは漬け物とか物置で一杯入っていました。子どもたちの「カクレンボ」の遊び場になっていたんです。



[写真3] 操車場上空から長島小学校(上右端)方向を見る。左下直下の機関車白煙のあたりから線路群下を潜って水路が道路方向に流れ、さらに長島小学校の西(左)側に伸びていた。左側には八甲通りと水路が見える。操車場に沿ったあたりが水害常習地帯。(1969 年 11 月 10 日、青森県史編さんグループ所蔵)



[写真4] 現在の旧操車場付近。手前のフェンス越しに水路開口部が見える。写真5は、その拡大。(2007 年 6 月 4 日)



[写真5] かつて操車場下を南側郊外から暗渠で流れてきた水路の開口部が残っている。四角穴の幅は 120 センチ、高さ約 1 メートル。当時を知る人はもっと大きいイメージがあったという。(2007 年 6 月 4 日)

蝦 名 「ダジンツケ」というのは、いまで言えば自家用のトラックを持った運搬業のようなモノですね。賃金、駄賃を貰っていたので「駄賃つけ」というんです。

室 谷 「バクロウ」は良く分かります。ウチは高田の農家ですが、「マヤ(馬舎)」があつて、そこは自分ところの馬が入っている。その近くに広い小屋があつて馬が 5、6 頭入っていました。母がいうにはバクロウに貸していて、売り物か何だか分かりませんが、そこに馬を入れていたんです。

五十嵐(正) 古川小の南の方にウチがありました。叔父さんの家が北片岡の元の山高(青森山田高校)の一番最初?の校舎の近くで、木村正枝さんが戦時中、学校を開いたところで、そこにしょっちゅう行きました。旭町の通りを抜けていくと七面鳥がグイーとくる。あれは攻撃的だ。そしてガチョウがいました。そこを通ると必ず襲われる。

五十嵐(豊) あれ、襲ってくるのはガチョウだ。…この地図のここはちょっと記憶と合わないね。

室 谷 資料の「青森市全図」(図 1)は昭和 5 年発行で、その後青森は戦災で焼けてしまったから、実際と合わない部分があるかも知れません。

五十嵐(正) 確かに、この地図は合わない所がある。

五十嵐(豊) 古川小学校のすぐ横、東側を川が流れていました。いまは暗渠になってしまったがあの川も良かった。ナマズなどがいっぱいいました。

工 藤 古川小の所を通ってくるのが金沢堰ですよ。

室 谷 旧線路の北側を通っているんですね。

五十嵐(正) そう、木村正枝さんところに近い叔父さんの家に行く途中、いったん旧線路に出る。その北側に沿って、コンクリートで護岸した水路があつて柳町の川のところに水門があつて合流するんです。東の方に流れていく。そして旧線路の南側が棟方君が言った春の水害の常習地帯です。そのあたりに牛乳を売っている店がありました。

棟 方 いまでもあるよ。私の 12 歳下の妹に飲ませるのに、母親に言われて毎朝、買いにいった。

工 藤 金沢堰も八甲通り、柳町の川も結構、広かったですね。幅は 2~3 メートルはあったと思う。

ナマズにはトゲがー その掴み方

室 谷 ナマズの話に戻るがどのようにして食べるんですか。

江 口 3 枚におろして、そしてカバ焼きにした。簡単です。

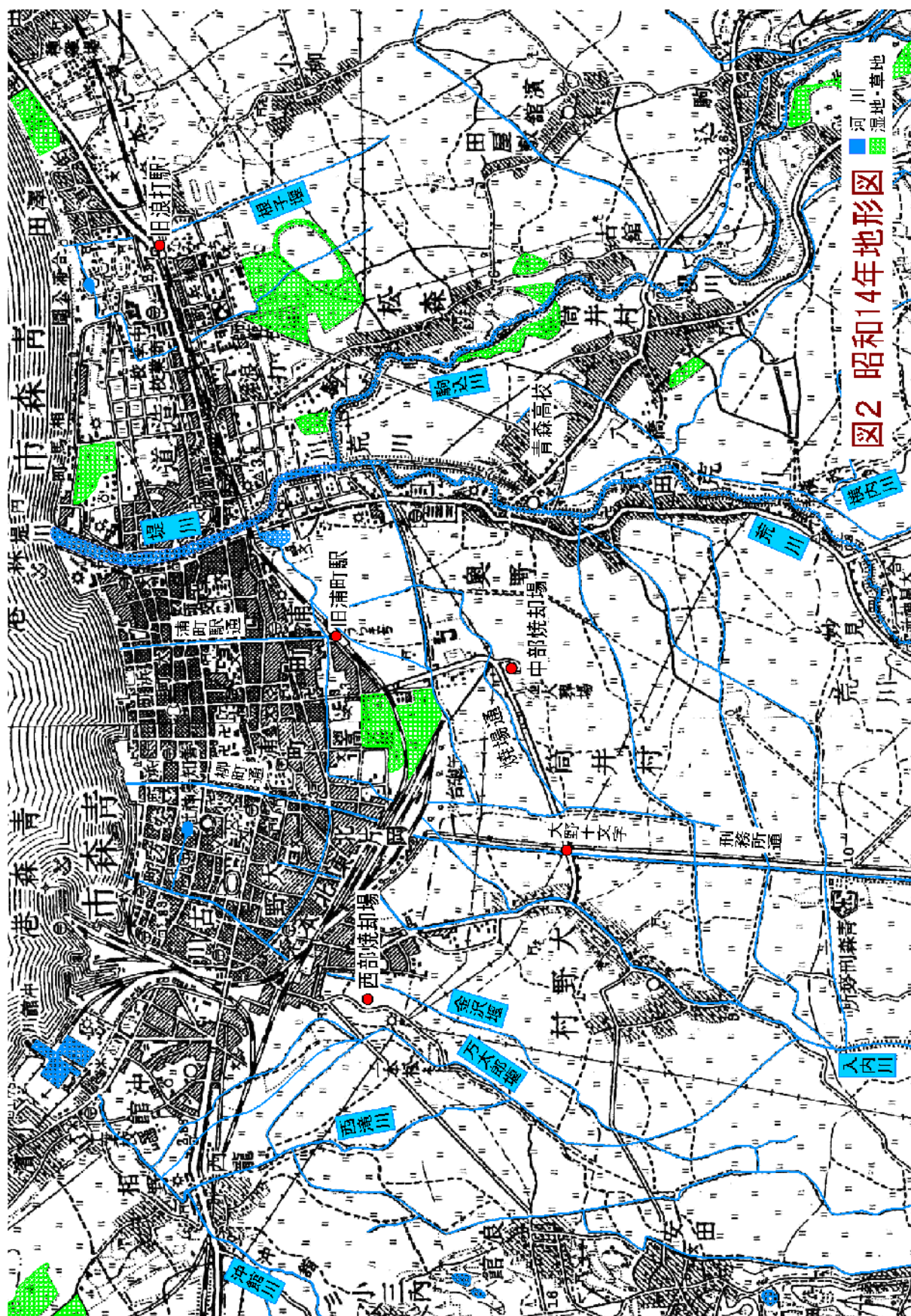
棟 方 ナマズは今でもカバ焼きで食べるところがあります。淡白でおいしい。



[写真6] ナマズを掴む(イメージ)

五十嵐(正) ナマズのとり方は手づかみが専門です。頭があつてそこに胸ビレがある。そのあたりにトゲがある。指をヒレのところにくっつけてから、こう掴む。春先になると雪解け水に流されてきて、夜活発に活動すると思うんですが、朝早くいくと流れの弱い川岸にいっぱい寄っています。下りていってそれを捕まえる。低温でほとんど動かないので簡単です。

五十嵐(豊) 穴に手をつこんでとるのも簡単。さっきの金沢堰でよく掴みました。鉄橋のところに石垣があつて、穴にナマズが頭を前にして入っている。穴に手を入れるとちょうどぶつつかる。それを掴む。



[図2] 昭和 14(1939)年地形図。国土地理院大正元年測量、昭和 14 年修正の「青森西部」「青森東部」から青森市街中心部と南側郊外を示した。原図の河川や水路を青色で、草地・湿地を緑色で塗りつぶした。河川・水路については原図にないものでも関係者の証言や他資料をもとに追加したものもある。



[写真7] 操車場上空から火葬場(上左)や旧午砲台跡地(上右)を見る。左側中ほどは旧浦町駅方向で、その下は旧県営体育館。前方の青森平野から川、水路が操車場を暗渠で潜って市街地に入ってきた。撮影は1965年11月8日で前方田園地帯には積雪が見られる。(青森県史編さんグループ所蔵)

山 道 図にでも描かないとよく分からない。

室 谷 後で写真を加えましょう(7頁の写真6参照)。今まで東北本線の線路とか操車場の北側、町中の川の話をしたが、三浦さんはその反対側に住んでいましたね。

三 浦 そう、ドン山ってあったね。午砲台をこう呼んでいて、そこに午砲住宅というのがつくられそこに住んでいました。住所は浦町橋本399番地で25世帯が全部同じ番地。

このデルタ地帯が私の遊びのテクトリーで、ここから青森高校に通いました。その見取り図とか周りの環境は図3にまとめておきました。これは昭和38年版市街図をもとに当時の私の行動範囲です。家を出てまず、線路の南側に沿って行くと、田圃の用水路から集まった水は3箇所の暗渠で線路を潜って町に流れていくんです。それを見ながらしばらく行くと防雪林があってマツとかハンノキ林。木の高さが5~6メートルはあったか。ハンノキからはミドリシジミの幼虫をよくとりました。林の中には小さい沼が点在していました。ここにはヌマエビとかミズカマキリ、タガメ、トンボの幼虫などがいっぱいいました。

そこから松原通りに出て青森高校です。地図(図3)に家から青森高校までの通学ルートを書いておきました。さっきの線路をくぐる暗渠ですが、一番大きいのが幅が1.5~2メートルで高さが1.2メートルほど。大人は大変ですが子どもはずっと奥まで入っていけるんです。10メートルほどまで潜るんですが、コンクリートの下の隅に両手が入るくらいの穴がある。ナマズが潜んでいて手づかみをする。五十嵐さんと同じです。ブリキのバケツに一杯とって家に帰りました。

ナマズ、フナの食べ方

室 谷 さっきは、ナマズはカバヤキにして食うとかありましたが。食べ方についてもっとありませんか？

棟 方 ナマズはうまい。

五十嵐(豊) 食べるときは、頭に釘を打って、そして皮を剥ぐ。

棟 方 そうそう、頭にバシッと釘、しっぽに斜めに包丁を入れる、すると血が抜ける。ドロめきとか、生臭さがとれる。

五十嵐(正) 味噌味にして焼いて食うこともありますね。

棟 方 ドジョウもよく食った。でも川魚は一般に好きでなかった。

五十嵐(正) 川魚は臭いがする。フナとかはとくに臭い。ドジョウ、ナマズはおいしい方だ。

棟 方 コイはまだいい方だが、フナは臭いがする。とにかく生臭い。

三 浦 ナマズの私の場合は、とってきたナマズは母が働いていたから向かいのオバサンに預ける。すると皮をはいで生干しにしてくれる。オヤジたちが、それを酒の肴にしました。

室 谷 フナの方は？

五十嵐(正) フナは釣ってきて、素焼きして弁慶にさして保存しました。昔は、ホタテのでっかい貝殻に保存していたフナを入れて味噌で味付けして、骨まで柔らかくして食べました。弁慶って藁を束ねてつくるんです。

棟 方 薫製にもしたね。あれはダシにもなる。

江 口 焼いて乾燥させたものを、さらに煮て食った。生でやるとダメなんだ。田舎に行けば、母親の田舎、昔のやりかたで食わせてくれました。

棟 方 「カク」ということも良くやりました。堰の水をカイでしまうんだ。家の裏が田圃で「タノクロ」(田の畦)を堰き止めてしまう。そしてカクんだ。水を掻き出すということです。すると主にド

コラム 「ドン山」と「午砲台住宅」

秋元良治著の「ドン山物語」(1977、北の街社)で、著者は次のように書いている。

「むかし、国鉄の操車場裏側に土がもられた小山があって、そのテッペンに四本柱で支えられた屋根があり、その真下に午砲一門が陸奥湾の方を向いてデンとすえつけられていた。そして、いまのテレビやラジオが正午の時報を知らせるのと同様に、毎日、正午には午砲をドーンと一発鳴らして、青森の市民に時を知らせたものだった。この午砲のおかれておった場所が、俗に“ドン山”と言われて市民から親しまれていた。

特に冬の“ドン山”は、私たち少年にとって手頃なスキー場でもあったし、夏には、この付近の野原で、トラボ(バッタ)やダンブリ(トンボ)をとって遊んだりした…」

「ドン山」の正式名は午砲台で、大正 9(1920)年 10 月、青森市鍛冶町に住む柏原彦太郎氏が、市民に正しい時間を知らせるために、室蘭の製鉄所につくらせ、青森市に寄贈した。

午砲台は、昭和 17 年に強制回収された。同 22 年には午砲舎も腐朽崩壊し、翌 23 年に解体され、平坦な敷地になってしまった。

一帯は青森市の所有で、戦後の住宅難から 25 戸の市営住宅が建設された。ここは午砲住宅と呼ばれ、一部の人たちは「ドン山町」とも言った。

秋元氏の著書が発行された時点では、青森市が児童公園をつくる計画があったそうで 25 戸のうち 2 戸しか残っていなかったという。

ジョウがいっぱいとれる。釣りなんて問題外で、そこにいる魚が根こそぎとれるんだ。泥のなかに潜んでいるドジョウなどもすぐ分かるので簡単です。

五十嵐(正) ドジョウは、秋になると水路から水を抜くでしょう。そして泥を掘ればニョロニョロと出てくる。

棟 方 そうだ。ドジョウ堀りをやったね。そんなに深くないところにいっぱいいました。

五十嵐(豊) 「ドン山」の下でよくカイだ。用水路の上流を止めて、そして下流も止めてやる。どっかに水を流してやらないとダメなので上の方をちょっと壊してやる。カクところは 5 メートルから 10 メートルの間でやった。

棟 方 そうそう、タノクロで堰の両方をくい止めてやるので、よく農家のひとに怒られましたね。

三 浦 私の場合も同じです。秋口になると水がなくなる。その頃、水の少し残ったところにドジョウがたまっていてスコップでいっぱいといった。タニシも一緒にとれましたね。

室 谷 さっきドジョウがおいしいとありましたが、津軽のドジョウは東京に輸出されていて評判だった。浅草にドジョウの専門店があると聞きました。

昔、といっても昭和 30 年代ですが、私は弘前にいましたが、駅のプラットホームにはドジョウを詰めた樽がズラリと置かれていて、キュウキュウと音がしていました。貨物列車に積むんです。今ではトラック輸送でしょうが。

それから、この前「森の広場観察会」(5 月 13 日)にきた、弘前の悪戸のかた(女性)の話ですが、子どもころドジョウをいっぱい捕まえて、ちょっと干してニワトリの餌にしたといっていました。贅沢な餌ですね。

小山内 小学校に入る前だったか、いや一年のとき(昭和 18 年)岡町に住んでいました。新城のすぐ近くで油川との間です。今の警察学校のあたりでしょうか。そこにはいっぱい小さな溜め池がありました。溜め池を 7 月頃、水抜きをして水をカイデシまって、みんな泥の中を足でかき回すと魚が浮いてくる。大人も子どもも裸になって魚をとった。ナマズからフナ、ドジョウ、カニもいるし、それを手づかみにしました。年に 1 回はやる、大きいのではコイもいました。そういう年中行事というか風習でした。

棟 方 溜め池の清掃も兼ねてやったんですね。「カグ」というのは津軽弁でそういうことなんです。

小山内 さっき、イカルという話がありましたが、私にもそのような経験があります。父が教師で高田の小学校にいたとき、春先には住宅がいきなり水浸しになってしまいました。昔の家は低いところにあると「イカル」ということは自然のことで、床上浸水も仕方がない。朝 6 時頃、目が覚めたら水が畳の上にあったとか。

工 藤 床の厚い板を釘で止めたりした。

五十嵐(豊) 金沢堰は古川小学校の近くで、春は必ず何回かやられました。床上浸水なんて珍しくない。畳をあげておかないと。スタンバイして待っているようなものです。庭のところにでっかいコイが入ってきて。兄貴(正俊)はこのことを分らないようだが、ということは昭和 20 年の春です。

五十嵐(正) そう、昭和 20 年の春は、私は青森を離れていた。この年は青森はナンバーワンの豪雪の年。融雪どき洪水が大規模にあつて、恐らく床上浸水が方々であつたでしょう。2 メートル以上もの積雪だったから、家には電線をまたいで入ったり、家のひさしが折れてしまうとか。

室 谷 終戦の年ですね。私は田舎育ちだが父の勤めの関係で市内の旭町に近いところに間借りしていました。そのときは 2 階から家に入りました。



[図3] 昭和38(1963)年市街図。正式名は青森市街図(新町名・新地番)、発売元・塔文堂。この原図から青森操車場～奥野・松森・筒井一帯を抜き出し、さらに一部住宅や防雪林・池・沼を付け加えた。さらに、河川や水路を青色で塗りつぶした。河川・水路については原図にないものでも関係者の証言や他資料をもとに追加したものもある。

五十嵐(豊) 道路からウチに入るのに何段もの階段をつくりました。幅が 7~8 メートルのウチの前の道路が、1 メートルぐらいになってしまいました。馬そりが一般的だったので、春にウンコ集めの馬そりが近所の玄関に落ちて、ウンコをまかれたこともありました。(笑い)

工 藤 私はずっと若いけど、金沢堰がイカッタのは相当の後までです。ウチは米屋だったものでオニギリを握って町内に配りました。金魚だとか緋鯉とか、普通はナマズとかドジョウだが、色のついたものも入ってきました。洪水なので、池で飼っているものも…。

山 道 私の通った小学校は橋本小学校です。校門の向かい側に専売公社があり、その北隣にお寺があり、そして角に東青病院(今のホテル青森のところ)がありました。ここにも南北に幅約 5 メートルの川が流れていてイガっていました(13 頁の写真 8 参照)。

台風など大雨の後にイガル川となり、そうなる大人たちが長い竿の網をもってきて、ナマズ、ドジョウ、フナとかの魚をいっぱいにとってタライにあつめていました。子どもだった私はその光景を眺めていました(昭和 27 年頃)。今は暗渠の排水溝となって、幅の広い道路の下を流れていると思います。

五十嵐(豊) 金沢堰はいつ頃までありましたか？ オレは学校を終わってすぐ青森を離れてしまったから記憶があんまりない。いつの間にか暗渠になっていました。

工 藤 オレ達、小学校のときだったから、6 年生で昭和 34 年。その後も数年はあったようです。

棟 方 イガルっていうのは、これは当時の青森市の、一つの風物詩ですよ。田圃も一面が水で湖のようになってしまうんだ。いまだったら、あのようになれば大問題。市は何をやっているんだ!ということになります。

小山内 そう、毎年あたり前のことで誰も文句をいわなかったね。

五十嵐(正) この「イカル」という常習地帯が方々にあつて、棟方君のところ、それに沖館川の関係で相野もそうでした。

江 口 春のと、台風のときの 2 回で、そういうときは三角網をかけてドジョウとかをたくさんとったものです。

町中の川にアユが入ってきた

工 藤 金沢堰もそうだったが、いまの八甲通りのところも必ずそうなっていました。その川は、の



[写真8] 水浸しとなった現ホテル青森付近。ここは浦町駅通と呼ばれ(現在は平和公園通)、水路があつて水害常習地帯であつた。その時はナマズ、フナなどを大人たちがいっぱい集めていた。左側の鳥居は橋本神明宮で図 1 の市街図には明記されている。少なくとも戦後の 1952 年当時にはこの神社はなかった(山道談)。(1935 年 8 月 23 日、荻原洋一氏所蔵)

[写真9] 県庁議会棟から八甲通を見る。水路が前方の市街地南側郊外から操車場を潜行して流れてきた。国道から南側には並木があり、北側にはない。水路は青森港に流れ出た。(1963年5月18日、青森県史編さんグループ所蔵)



今のアスパムのところに河口があつて、両側の岸壁には釣り人がたむろしていました(15頁の写真10参照)。子どもの頃、オヤジに連れていって貰ったが、海からチカミみたいな群れでアユが入ってくる。小さい毛針でそれを釣りました。アユ毛バリという金色のビーズのついた針。昭和30年、40年、いや30年頃までは、まだアユがあがってきていた。季節は5、6月ですね。

室 谷 そのアユの話は面白い。

工 藤 八甲通りの川でも、ほかのところでもちょっと大きい川であれば、みな入ってきていました。あまり、流し(台所)から汚いものとか、下水とかが流れていればダメですが、あの頃は側溝がまだ整備されていなかったから見た目はあまりキレイでなかったが、水そのものはそんなに汚れていませんでした。

五十嵐(豊) アユの記憶は全然ない。

室 谷 それは、荒川の毒水との関係から面白い話ですね、あとで皆さんからもっと話を聞きましょう。町中の生き物ということで色々と話していますが、二唐さんはありませんか？

二 唐 私もアユの話をちょっと。私の生まれは浪岡ですが、父が教師で転勤で青森に住みました。当時は合浦公園に近い旧浪打駅の山側に家があつて高校卒業まで18年間、ここで生活しました。当時は合浦公園から500メートル南に国道4号線があり、これに平行して東北本線が通っていました(16頁の写真11参照)。その駅構内の下を根子堰が流れていたんです。幅が2〜3メートル。夏は合浦公園で水浴びをしたあとは、すぐ近くの根子堰で遊ぶんです。

小学校から中学校の頃ですが、アユをいっぱいとりました。毛バリでいくらかでも釣れました。昭和20〜22年あたりです。この根子堰は子どもたちの遊び場です。その遊びというのは川岸に生えているヨシの葉で笹舟を作って流したり、短い竹サオに木綿糸と釣り針をつ

けて、家の周りの土を掘って捕まえたミミズをつけて川へ落とすと、どこからともなく 5 センチくらいのハゼが食らいついて 5、6 匹釣り上げたり、割り箸を折って作ったうきをつけ流れがよんでいる所に釣り針を投げ込むと 10 センチくらいの小ブナがよく釣れました。

あるときフナの大群がきて子ども達は手製の網で追いかけてましたが、私は 30 センチものフナを捕まえ、今までの最大の獲物でした。

蝦 名 アユがいっぱいいたというのは、終戦前後の 20 年あたりはとるひとがいなかった。みな兵隊に行ってしまうと、とる人が少なかったんですね。

室 谷 ナマズの話にはじまって、アユなどといった清らかな水の生き物の話になってきましたが、そうなればイワナとかヤマメの話になりますね。

五十嵐(豊) いや、その前にナマズ釣りがあります。ネマガリダケに 2 メートルから 3 メートルの凧糸を付けて、それに昔、タラを買うと一緒にハリがついてきた。そのハリにカエルなどを付けて川の岸にさしておく。バゲ(夜)挿して朝になって、そこにいくとでっかいナマズが釣れている。

室 谷 私もそれ、入内川でやりました。青モッケ、アオガエルを餌にして。この川ではモクズガニがいっぱいいて、金網にスルメをちよっとくり付けて、石の重しで川底に沈めておきます。そうするとカニが乗っかってくるのが分かりますからスツと上げる。もっともこんなやり方では能率が上がりません。農家のひとは、恐らく穴を見つけてだと思うんですがいっぱいにとってきて、大きな鍋に入れて茹でていました。農作業の合間のオヤツにするんです。

二 唐 ナマズの穴を探して腕をつこんで捕まえましたが、一度エラのところにトゲがあって刺されました。あれは痛い。それからナマズとりはやめました。

五十嵐(豊) あれに刺されるのはシロウトです。チョス(触って掴む)ところが分かっていない。

二 唐 根子堰には川蟹もたくさんいました。流れの真ん中にある岩で甲羅を干すように群れて



[写真10] 旧連絡船棧橋上空から青森市街地を見る。海上中央の防波堤右端あたりに流れ出るのが八甲通の水路で、同じく左端あたりに流れ出るのが柳町通の水路開口部。この辺の岸壁には釣り人が多く、時期にはアユも遡上してきた。(1969 年 11 月 10 日、青森県史編さんグループ所蔵)



[写真11] 合浦公園上空から見た浪打など東部地区。合浦公園周辺には野球場など各施設があり、また右端には国道と平行して走る東北本線、そして旧浪打駅がある。遠景には根子堰や赤川が流れてくる水田地帯、さらに東岳はほぼ無傷の山容を見せている。(1960年10月29日、青森県史編さんグループ所蔵)

いました。たしか、「モチガニ」とか「月夜ガニ」と言って脱皮したばかりのカニを捕まえて遊びました。ハサミに毛が生えているのが「クマガニ」と呼びました。指を挟まれて痛い目にありましたがコツを覚えれば挟まれません。一人前と認められたものです。

ときどき腹の赤いイモリが引っかかってきて、子ども達はアカハラと呼んで、これに噛まれると雷が鳴るまで離さないと恐れられ、これが釣れると釣り道具一式を投げ捨て、家に逃げ帰ったものです。

五十嵐(正) さっきから金沢堰のことが出てきましたが、金沢堰の西側の上流の方にゴミ焼き場があつて、青森市のゴミをそこに集めて焼却処理をしていました。そのわきを金沢堰の上流が流れていました。それがまた良い川でした。さらに上流では水が澄んだ細流になってジュズカケハゼも住んでいました。

室 谷 それは入内川の延長ですね。魚がよく住んでいる川です。

棟 方 オレ、酒が好きなもので今でも食いたいののは田ツブ、タニシです。酒の肴で田ツブは上の部類だ。オレだち、あの頃、田圃へ行けばツブの跡が付いていてそれをとってきて煮て食べました。

溜め池は貴重な生態系

室 谷 さっき溜め池をカクという話がありましたが、小山内さんは溜め池の生き物を調べていますね。

小山内 青森の水環境というのは、大きく分けて二つに分かれます。山に近い上の方と、下はまったく田圃と溜め池しかない。今、もっともダメになっているのは田圃そのものがダメになってからです。丸いマルタニシ、オオタニシでなくて普通のタニシですね。これはまったく絶滅に近い。理由は何もない、環境がないんです。メダカも少なくなった。ドジョウもね。もう一つ言

えば溜め池も変わってしまいました。

青森の溜め池は南の溜め池とは違う。南の方にもたくさんある。四国でも九州でも、中国でも。それとこっちは違う。何が違うかというと、こっちの方は水を集めてゆったりと田圃に供給する。溜め池の下は必ず湿地帯。溜め池を土で抑えていて水漏れが必ずあって湿地帯になる。そして田圃に水が入る仕組みです。その溜め池と田圃の間が、本当に多様な生き物を育む環境になっていました。

ところがそういった溜め池は、今はなくなってしまった。私は色んな溜め池をみてきたが昔の青森の溜め池を評価しています。南の地方は水不足とかに備えていますが、こっちは八甲田山などがあって水はいつでもある。その溜め池も今はコンクリートでつくって水漏れがないんだ。生き物もいない。昔は実に工夫されていました。

五十嵐(正) 溜め池ですが、そこに住んでいたのがシナイモツゴ。宮城県の品井沼で発見されてこの名がありますが、ここの保護団体はこの前、環境関係の賞を貰いました。シナイモツゴは青森にも住んでいるのが分かったが、それは野木和湖の奥の又八沼です。そこだけでなく西部一帯の溜め池にも生息していたらしいんだ。

工 藤 もともと、石江の笹森沼だったのでは？

小山内 あそこはダメになってしまいました。

室 谷 笹森沼は昔、氷を取るところですね。

小山内 ちょっと話を戻しますが、青森市内の溜め池でもうひとつ大事なものは三つの溜め池です。ここでは氷を採取しました。何年頃からだったかは正確に分かりませんが、ひとつは新城の上堤で地図(5 万分 1)にも出ています。それと笹森沼と野木和の沼。



左から小山内・五十嵐

この三つはキレイな水だったので、2 月頃から氷を切って取りました。それを運んでムロみたいなモノを作ってオガクズを入れて夏まで保管しました。その氷を色んなものに使ったんです。それだけに水がキレイで溜め池を大事に使っていました。溜め池を色々と調べたが野木和なんかは名物でした。馬そりで曳いて運んで、何館でしたか、あのファブリのイタリア館の缶詰工場の隣に氷を取るところを作っていました。このように沼の氷をとって運ぶのも一つの風物詩だったんです。

五十嵐(正) 昔の氷はノコクズの中で保存しましたね。

先人の知恵はリサイクルの極地です

棟 方 今はやりの太陽熱利用のようなもの。まさに理にかなったものです。

五十嵐(正) だから、昔の溜め池はみんなキレイ。

室 谷 そういった意味では日本モデルは素晴らしい。持続するモデルですね。

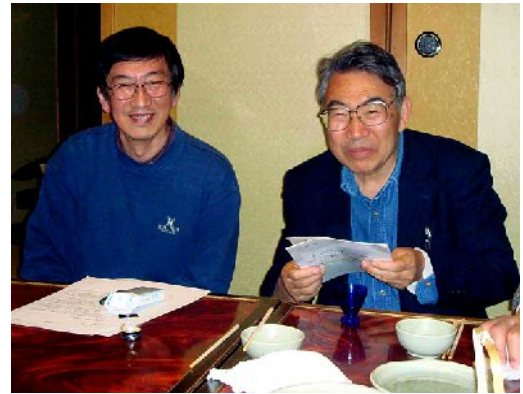
棟 方 本当の生活の知恵です。自然循環をうまく使っている。肥汲みだってそうだと思う。あの折角の大事なものを、いまは全部、金をかけて処理してしまう。昔はみんな畑に返してダイコンだの野菜だのを作った。

五十嵐(正) 昔の農家は、自分の畑の一角に必ず肥溜めがありました。

小山内 それにドボンと入ったりして。(笑い)
棟 方 大体、みんな落ちているだろう。
室 谷 私のウチは農家だから、あの、母屋があるでしょう。母屋とトイレの間は相当はなれているんです。母屋の後ろにカグジ(裏の畑)がある。その近くにトイレがあるんです。これから、すぐ近くの裏の畑に肥料を供給する。

またカグジの一角にはゴミ捨て場がある。これをハギダメと呼びます。ここではニワトリがワンドース位は常に成長しています。食べたいと

きは食べれば良い。だけれど鶏肉はご馳走ですよ。ゴミが腐敗して発酵していけば良質な堆肥として利用する。キッチンしたりサイクルです。今のプラスチックだのと、ゴミになると手に負えない。



左から石郷岡・小山内

高度経済成長で環境が急変

室 谷 きょうの座談会では、先輩たちの話に圧倒されて口を閉ざしているひともいますが。

石郷岡 私の住んでいるところは市内の西の方で長島小学校あたり。中学校のときは今の文化会館あたり(旧野脇中学校)で、ほとんど町中しか知らないんです。いま話題になっている堰も何カ所かは覚えていますがほとんどが暗渠になってしまった時代です。

私は昭和 29 年生まれで、子どもで動き回ったのは昭和 30 年代でしたが、町中には何もなくなっていました。善知鳥神社はまだ土が見えていて、そこに生えていたタンポポが、当時はニホンタンポポだったのか、もうセイヨウタンポポになっていたのかも確認していませんでした。その年代には旧市内あたりには、生き物がほとんどがなくなってしまったということでしょうか。

室 谷 たしか昭和 30 年代、40 年代にかけては高度経済成長がどんどん市街地を変えていった。車道が広げられ水路が埋められてしまった。私の友人でその当時、昆虫少年だった佐藤博さんというかたがいます。新町に住んでいました(3 頁の図 1 参照)。このまえ、こういう企画があるからと当時の話を聞きました。

彼は昭和 24 年生まれで昭和 34 年頃は、その辺が遊び場でした。県庁のすぐ西側を海に流れる川と金沢堰の延長にはナマズが多かったそうです。そして新町あたりではちょうど菊屋デパートがなくなった頃、水路がコンクリートで覆われ道路になってしまったそうです。

善知鳥神社の沼は格好の遊び場になるのですが、そこにはフナとかカメ、ヒキガエルが多く、水生昆虫ではゲンゴロウ、アメンボ、ミズスマシ、フーセンムシ、ミズカマキリにギンヤンマやシオカラトンボなどのトンボの仲間が多かったそうです。そして面白いのは、昭和 34 年頃の話ですがスルメをエサにしてアメリカザリガニを釣ったということです。

アメリカザリガニというのは帰化動物の典型で、当時、私は弘前市にいて平賀町(今の平川市)などの田圃ではタノクロ(田蛙)に穴を開けるといった大変な害敵でしたが、青森平野の私の田舎の高田なんかにはいなかった。そこでは在来種のニホンザリガニなんです。こ

のアメリカザリガニは町など開けたところに分布が拡大したそうですが、さすが青森は都会だと思いました。

工 藤 きょうの先輩たちの話を聞いて、私も若くはないというのが分かりました。皆さんへの仲間入りできるのではないかと…。昭和 30 年そこそこで小学校ですから、さっきから言っている金沢堰、それから八甲通りとか柳町などのタテの川は子どもの頃から遊び場でしたから、さまざまなことがありました。

五十嵐先輩は古川 3 丁目でしょう。私は 2 丁目です。旧線路のちよっと国道側。新天地という青森では早めにできたスナックなど飲み屋のテナント街です。新天地という看板がウチの真向かえにありました。

五十嵐(豊) 遊郭があったところ？

工 藤 それは線路というか踏切を越えた南の方です。私のところは国道から 100 メートルぐらい南側のところ。それで古川小学校の方からきた金沢堰がありました。さっき洪水のときオニギリをつくって配ったという話をしましたが、私のところ、旭町通りはコメ屋横丁と呼ばれたと父が言っていました。国道方向にもコメ屋が何軒かあって、線路を越えた方にも何軒かあったんです。大野とか細越、高田など農家の人がコメをもってきて、馬車とか冬は馬櫓ですが、コメを運んできてコメ屋に渡すと近くの飲み屋に行きました。それで昔から飲み屋が多かったのです。

五十嵐(正) そう、その辺ですね。ゴミ焼きのところからずっと流れてきて古川小の脇を通って旧線路を潜ったあたりから暗渠になって、それからまたずっと川になっていたんです。最後は安方で青森湾に入る。

この川が改修されてコンクリートの護岸になったのは小学校に入ってから間もない頃(2 年生?)で、記憶に残っているのは木の板で護岸され、大きなシダレヤナギの木がありました。その対岸に馬の水浴場がありました。

工 藤 それで、6 年生のときカエルの解剖をしました。古川小学校の毎年の理科実習です。3 階の校舎で解剖したあとの死骸は窓から金沢堰に投げて捨てたりして。また、線路に 5 寸釘を置いて潰して、それをヤスリで磨いて棒に付ける。棒にはヒモを付けて、川を流れてくる木片に投げつけて刺すんです。そういう遊びもあったんです。

五十嵐(正) そこを汽車が行くとイヤー、という歓声があがった。釘が平らにつぶされて、それを砥石でとぐとナイフになる。

室 谷 大変なというか、恐ろしい遊びをしていたんですね。これは決して褒められることではありませんが、当時としてはさまざまなことがありましたね。ただ、これは線路に置き石とかの悪意にみちたものではなくて、ひとつの道具を作ろうという目的があったんですね。その手段として線路を使った。金づちがわりですね。

旧浦町駅から南は生き物の楽園

山 道 私は橋本にいました。今の教育会館のウラです。昭和 18 年から 41 年までそこで暮らしていました(戦災で疎開していた 20 年～23 年は除いて)。24 年頃ですが、近くに戦災で焼けた大きい建物の基礎とかがあって、雑草などが生えた荒れ地でした。タンポポとかクロー

バーなどが咲いて甲虫などがいっぱいいて、ここが一番最初の遊び場でした。後に、ここは橋本小学校の校庭になりました。

室 谷 その頃から、昆虫少年だったんですね。

山 道 そのあと、遊びに行ったのは旧浦町駅(今の平和公園)を越えたところでずっと田圃でした。次の第2線路、これは操車場のところで、たくさん水溜まりの穴があって…。



左から工藤・山道

五十嵐(正) 今の勝田のあたりは東北本線のまわりになり、その土手を築くために方々に穴を掘りました。その土で土手を盛った。だから線路の周辺は全部、穴だらけです。大小の沼とつながっていて、それがずっと続いていた。

山 道 さっき三浦さんが言ったところなんですが、その穴のかたちが四角なんです。何でと思っていたのですが、線路の土盛りということで謎が解けました。三浦さんはマツとかハンノキ林とか言っていましたが、私の記憶ではスギがあってヤナギもあったという…。そこでトンボを追いかけてリドジョウを採ったり。とにかく沼とかがいっぱいあり、それが筒井まで続いていた。

室 谷 さっき善知鳥神社の沼の話を紹介しましたが、その友人の佐藤さんは新町から浦町駅の近くに家を移し、昭和38年頃は、そのハンノキ林周辺がチョウの楽園だったと言っています。

浦町駅の南側に踏切があつてそこを越えようとほとんど田圃で見晴らしが良かった。畦道状の車が通れるくらいの道が続いて、さらにもう一度、線路を越えるとまずスギ林ですごく暗いイメージがあつたそうです。そこを過ぎるとハンノキとかヤナギになって線路側には農家が数軒あつたそうです。そしてこの辺が楽園なんです。ミドリシジミはもちろん、コムラサキ、ヒオドシチョウ、ルリタテハ、クジャクチョウ、キタテハ、コムスジ、オオミスジなどとひととおりの蝶の種類がとれたそうです。

山 道 そうです。私の場合は小学校の頃は家の裏とか近くの草むらから浦町駅周辺まで。中学校になると滝沢とか梵珠山などとエリアが広がっていきました。

それから小学校の頃、昭和27、8年頃ですが、浦町駅のすぐ南側に100坪～200坪の池があつてフナとかエビを捕まえました。また今の国土交通省の出先機関とか職業訓練所があるところは広い湿原でヨシなどが生えていました。ここには、あとで名前が分かったのですがウシガエルの大きいオタマジャクシがいて1回行つては2～3匹捕まえて喜んでいました。いつ誰が放したか分かりません。薦温泉周辺でも持ち込んだものが住み着いていますから、ここにもおかしくはないのですが。

五十嵐(正) そちら辺はなかなか自然が豊かなところで、この前の会報に詳しく書いています。(「少年時代の自然環境」第1回は本誌17号、第2回は同18号参照)

山 道 そうですね。それから浦町駅から北東に流れる川は自然的な川でフナとかナマズが多かったですね。浦町駅から筒井通り寄りに大きな水をたたえた所があつて…。

室 谷 地図にある小館木材の池というか沼ですか？

山 道 そう、これこれ。これがありました。そこは案外浅い。浦町駅の線路沿いではハラビロトン

ボがいっぱい飛んでいて捕まえました。浦町駅の線路の引き込み線のところにはカナヘビがいっぱいいて、それを捕まえてポケットに入れてウチに帰った。後で、家のあちこちからひからびたカナヘビが出てきて、「こんなにするなら採ってくるな」と父さんに怒られて…。

室 谷 もともと青森平野は湿地であって、沼も方々にあったと聞きます。さっきの湿原ですが、佐藤博さんの話ですが、浪打小学校の南側にもかなり広い湿原とそのなかに小さい沼があったそうです。そこでハラビロトンボをとったとか。また合浦公園のちよつと東側にも、またさらに東側の八重田ですが赤川の河口付近にも湿原が残されていた。昭和 30 年代の終わりのころまでは、市街地にも昔の名残があったということです。

山 道 それから、さらに堤川を越えて田村牧場がありました。今の青森テレビのところですか。そこにはエゾエノキが 3 本あってゴマダラチョウが飛んでいるんですがなかなかとれない。落ち葉に隠れて越冬する幼虫はよくとりました。オオムラサキはいませんでした。

室 谷 田村牧場のところは今、高級住宅地です。その前に小さい神社があって、1 本だけエゾエノキの老木が残っています。いま、ゴマダラチョウはいません。

山 道 オオムラサキは、野内の貴船神社で見つけました。祖父の家は野内字鈴森というところで、すぐ裏が貴船神社です。そこで初めてミヤマカラスアゲハを採って、興奮している小学 2 年の少年がいました。オオムラサキ、ゴマダラチョウ、ミドリシジミ、ムモンアカシジミ、カブトムシ、アオカナブン、ミヤマクワガタ、セミの数々。覚える種数が増えました。当時はまだ野内村でした。そう言うわけで、祖父の残した畑を、いま私が耕しているところです。

工 藤 たしかに小学校の頃には、線路のあたりにはカナヘビがいっぱいいましたね。昭和 30 年代でもいたように記憶しています。

五十嵐(正) 爆弾の穴も方々にあったのではないですか。

五十嵐(豊) 空襲のとき、操車場のところでは爆弾が落ちてきて危なかった。

三 浦 爆弾穴は、私の記憶では 3 か所ありました。午砲住宅から南の方で距離をおいて一つ、二つとあって三つ目が一番大きくて直径 10m ほどはあったでしょうか。そのまわりにはヤナギなどが生えていて、その隙間からフナとかを釣ったりしました。深さは 3m ほどはあったと思います。イモリとか水生昆虫なども多くいました。

五十嵐(豊) 私は昭和 40 年から高知へ行きました。当時は自然がないと言っていました、今思えば多かった方で、大阪からカブトムシなどをとりに子どもが密航してきたことがありました。青森の話に戻ると線路の下のところとか金沢堰のことなど今でもときどき夢を見ます。いつの間にか暗渠がなくなっていました、このような身近なところが一番、思い出になります。

棟 方 ずいぶん、良い話がいっぱい出てくるね。イナゴを食うというのもあったね。オレはイナゴは大分食った。田圃にいけばバタバタと跳ねてい



[写真12] 旧田村牧場に隣接した松尾神社境内のエゾエノキ。主幹が枯死し枝の部分が梢を形作っている(2007 年 6 月 4 日)

た。足と羽を取ったけどあとは殆ど食べる。あれはしばらく大きくなるまで食べていました。

五十嵐(正) イナゴを食べるのは、しばらくは続いていた。

室 谷 いつ頃になりますか。

五十嵐(正) 昭和 20 年の終戦前後、小学 5 年のか 6 年の頃です。

二 唐 私の住んでいた浪打の方もすぐ田圃になって、稲刈りが終わった頃はイナゴが無数にいて、子ども達はビンにびっしり詰めて、それを近くのニワトリを飼っている家に持っていき、ときどき卵を貰ったりしました。そのニワトリがときどきテンに襲われ一晩に数羽殺されたという話を聞きました。昔はあのあたりにもテンがい



左から棟方・五十嵐

たんですね。

山 道 私の記憶では、家が貧しかったからニワトリを数十羽飼っていて、卵を弁当のおかずにしていました。秋の休みの日にイナゴ採りの袋を持って、田んぼに行き、ニワトリと自分のエサとしたんです。4 年生の頃まで採っていたから、昭和 28 年あたりまで。その後、急にいなくなっていました。

室 谷 私はずっと田舎ですが、中学校のはじめ頃まではみんながイナゴとりをして一升瓶に詰めて、それをまとめている家に持って行って、小遣いにした記憶があります。だから昭和 27、8 年になります。いなくなった年代がピッタリ合っていますね。

棟 方 イナゴがいなくなったのは、五十嵐さんから解説しないと。

五十嵐(正) 農薬は、最初は DDT とか BHC を使いました。そのあとアルドリン、ディルドリンとかでいわゆるドリ剤(下記の補注参照)というのを使うようになって、とにかく残効性がありすぎて何もいなくなっていました。ディルドリン、エンドリンとかさまざまな農薬がありました。

小山内 青森市史の執筆の方をやっていますが、こういう話が出てこないとダメですね。生きた話が欲しいんですよね。

室 谷 まだまだ、何度でもやりましょう。この続きは青森市の郊外の水辺について、つまり清らかな川に住むアユとかイワナ、ニホンザリガニの話などをうかがいます。

(以下次号に続きます)

【謝辞】今回の座談会は、青森市の戦前から昭和 30 年代の高度経済成長が始まる頃が話題となりました。当時の市街地の様子を数々の写真で紹介しましたが、これらの貴重な写真を提供された青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ、東奥日報社、そして荻野洋一氏に深く感謝します。

【補注】ドリ剤とは有機塩素系殺虫剤で、これに含まれる POPs 物質は、「残留性有機汚染物質に関するストックホルム条約」(通称 POPs 条約、2001 年 5 月採択)で製造・使用が原則禁止された化学物質。人や環境への毒性、難分解性、生物濃縮性、長距離移動性の性質を有している。

コラム 青森市の水辺環境の変遷 — とくに東北本線の路線変更から見る —

今回の座談会では、出席者から住まいの近くを流れる川とか水路に息づいていた多様な生き物の様子が話された。今では街のどまんなかになってしまったところでナマズを捕まえたとか、アユが群れをなして川を上がってきていたのである。東北本線の線路の近くに住んでいたひとは線路の下を潜ってきた流れでナマズを手づかみにしたり、モクズガニを捕らえたりした。あるいは今は埋められてしまった駅の下を堰が流れていて、子どもたちの格好の水遊びとか川遊びの場所であった。それは、3、40年前の風景であった。

ところが出席者に、その川や水路はどこから流れてきて、どこを通っていたのかと問うとなかなか明確な答えが返ってこない。町中の様子があまりにも変わってしまったのである。区画整理が進み、街路に沿って流れていた水路もいつの間にか覆われたり埋められてしまった。それでは、とできるだけ当時を再現しようと各年代の地形図や市街図を探してみたが、国土地理院の地形図はこまごましたところまでは書いていない。市街図は町名や番地が主体で一部の水路は示されているものの、そのまま信用できないものが多い。それではできるだけ多くの図を見ることによって当時をいくらかでも知ることができるのではないかと、その作業を続けた。

総体的に言えることは、当然のことながら市街地がどのように発展していたかであり、その変遷の要素として大きいものに東北本線の数度にわたる南方移転が、大きく作用していたことである。

□ 東北本線の最初のルート of 時代 — 明治 24 年～

明治 21(1888)年 5 月、盛岡・青森間が着工。わずか 3 年 4 か月後の同 24 年 9 月に東北本線東京・青森間が全通した。ついで、3 年後の同 27 年 12 月には奥羽本線青森・弘前間が開通。その早さには驚かされる。この時点での青森市内のルートを示すのが図 4 で、これから大正 15(1926)年当時の水辺環境を推測することができる。

現在、通称「旧線路通り」と呼ばれているルートに着目したい。青森駅は市の西端にあり、東の堤川と南の線路に囲まれているのが市街地であった。南側の線路周辺にはまだ相当範囲の田園が残されており、線路を越えて広大な田園地帯が広がっていた。このなかには湿原とか池沼もあった。

青森市街地には八甲田山系から西に連なる山地に源を発した入内川が数多くの堰、水路に分散されて網目のように田畑を潤し流れていた。市街地中心部には金沢堰、八甲通りや柳町通り、浦町駅通りの水路などが流入し、縦(北へ)に流れて青森湾に、あるいは横(東へ)に流れて堤川に流れ出た。一方、青森駅から西側は、沖館川や入内川本流がそれに合流して青森湾に流れ出た。荒川と駒込川の大河川があり、その合流である堤川。荒川には、合子沢川、横内川が流れた。八甲田山系東側の山間から流れる根子堰、赤川などが田畑を潤して青森湾に流れ出た。市街地にある善知鳥神社の池には金沢堰が、合浦公園の池には根子堰から水が供給された。

□ 青森操車場完成による 1 回目の南方移転 — 大正 15 年～

大正 15(1926)年 10 月、浦町・青森駅間に工事が進められていた青森操車場が完成した。これにより堤川から青森駅までは大きく南側を迂回した線路に変更された。座談会記事に挿入された昭和 5 年版「青森市全図」(図 1)や国土地理院の地形図(昭和 14 年修正、図 2)が、この頃の位置関係を示している。

この路線変更によってできた旧線路との間の田園は急速に宅地化され、あるいは学校などの公共施設などに占められていった。川とか水路は操車場や線路を暗渠で市街地に潜入し、また地上に現れた。



[図4] 大正 15(1926)年市街図。「青森港修築工事誌」(青森県土木課、1926)の付図をもとに河川・水路を青色で塗りつぶした。本図には東北本線が青森まで延伸した初期の線路ルートが示されている。

したがって水辺環境は損なわれることなく多様性は維持されていた。このことは座談会で多様な魚類や昆虫などが市街地各所に豊富に見られたという証言からうなずける。流れは北上して縦軸に青森湾に流れるだけではなく、旧線路のあたり、あるいは線路に沿って東側へ横軸の流れも見られた。図2の地形図で緑色に塗りつぶされたところがあるが、これらは湿地とか草地を表している。さらに特筆しなければならないことは、操車場から東への線路延長の土盛りのために土を取られたところは、数多くの池沼として残されることになった。線路の南側には時を告げる午砲台があり、さらに防雪林が線路の南側にあった。これらは水生生物に限らず陸生生物にも適した環境で、さながら生き物たちの楽園であった。

□ 2回目の南方移転－昭和43年～

第二次世界大戦後の高度経済成長は青森市においても市街地拡大をうながし、昭和43(1968)年7月、東北本線のさらなる南方移転となった。これは現在のルートで図には示さなかったが、図3の青森操車場の筒井小学校方向に延びる従来の引込み線を延長し、さらに現在の東青森駅を新設して東方になぐものであった。これによって旧浦町駅、旧浪打駅が廃止。移転時の直後では操車場から東側はまだ田園が広がり川や堰も旧来の姿を見せていた。例えば図3は昭和38(1963)年のものであるが、防雪林やそのなかに沢山の池沼が残り生物環境の名残があった。

しかし、これ以降の変貌ぶりはとうてい文章に表すことのできない急速なものであった。市街地拡大は西から大野、浜田、筒井……と進み、初期の頃はそこから田園地帯を一部残して、ずっと離れた幸畑、戸山などに宅地化が進められたが、やがて中間の田園地帯の多くが住宅とか公共施設、大型商業施設に占拠されていった。

昭和51(1976)年の青森市街地地図を見ると、この時点では八甲通り、柳町通りや根子堰の水路の一部はまだ地上に露出していたが、ほどなくしてコンクリートで覆われ、あるいは埋め立てられていった。

□ やがて東北新幹線がやってくる－平成22年

平成22(2010)年には東北新幹線が青森まで完成の予定。八甲田山山麓から地上に出た線路は荒川と高田間を通り、細越でトンネルに入り石江の新青森駅に至る。いままで2度にわたる東北本線の南方移転では、市街地と南方の新しい線路との間を市街地に塗り替えるといった環境変化をもたらしたが、現在では、もはや新幹線ルートに残る田園地帯は「土地改良」の名のもとに大面積の田地に変更され、そのなかを流れる川はコンクリートで直線化されてしまった。生物の多様性をもたらす環境は、すでに失われているといっても過言でないだろう。

もし、いくらかでも環境保全の可能な場所があるならば、あるいはそのような場所を見いだして、民と行政の理解のもとにそれらをいかに積極的に復元していくか、それがこれからの課題のように思えてならない。

【参考文献】青森県土木課(1926)、青森港修築工事誌、青森県。青森駅(1973)、青森駅ものがたり(鉄道100年記念誌)。青森駅開業90周年記念協賛会(1981)、ものがたり青森駅史(開業九十周年記念)。青森駅開業百周年実行委員会(1991)、青森駅百年史(青森駅開業百年記念)。